

男性同性愛者からゲイ男性へ： ネガティブからアファーマティブへ

成城大学大学院文学研究科博士課程
コミュニケーション学専攻前期 1 年

萩 野 員 也

同性愛の診断

同性愛 (Homosexuality) の診断の歴史は、1886 年にドイツの司法精神医学者クラフト・エビングがその著「PSYCHOPATHIA SEXUALIS」の中で「色慾倒錯症」に分類したことにはじまる。この本は何度か邦訳されており、日本法医学会 (1894) が「色情狂篇」、大日本文明協会 (1913) と松戸 (1951) が「変態性慾心理」、平野威馬雄 (1956) が「変態性慾心理学」とタイトルをつけている。本稿では大日本文明協会 (1913) のものを用いることにする。なぜなら、1913 年以降「変態性慾論」(羽太・澤田, 1915) が出版されたり、雑誌「変態心理」(日本精神医学会, 1918) が創刊されたりと、変態性欲に関する書物が出てきたため、この翻訳本が日本における性欲研究や変態性欲研究の最重要文献と考えられるからである。「色情狂篇」は、刊行後司直の手によって発禁となった(松戸, 1951)。

クラフト・エビングは、「倒錯的色情の現象は、明らかに唯、機質的に素質ある個人にのみ発見せらる。素質なき人が手淫或は同性者の誘惑に依りて倒錯的色情となることなし」と、同性愛を先天的なものとみなした。同性愛を「代償的色情及び性慾衝動に因る対異性感覚の消失」とし類型を試みたが、その後の理論的發展はみられなかった。また、同性色情(同性愛)の処置について、

- (1) 手淫及びその他性欲生活を害する動機を除くこと

- (2) 性欲的生活の非衛生的關係より生じたる神経病を除去すること（色情性及び全身性神経衰弱）
- (3) 同性色情の防止，及び異性色情並びに異性色情的衝動を促進する意味における精神的療法

と記し、「治療の困難なるは (3) 及び手淫の点にあり」としている。このことからクラフト・エビングは、同性愛を「治療すべきもの」とみなしていたことが言える。

フロイトはその著「性欲論三篇」において性倒錯を 2 つに分類した。一つは「欲望（あるいは目標）の倒錯 (perversion)」であり、もう一つは、「対象の倒錯 (inversion)」である。前者はサディストやマゾヒストのことで、後者は同性愛や幼児愛などである。フロイトは同性愛の原因として、母親への固着をあげている。

しかし、フロイトは同性愛が病的であるかについては明言を避けている。1935 年の N.N. 夫人宛の手紙で「同性愛はたしかに利点ではありませんが、なにも恥ずべきことではありませんし、悪徳でも堕落でもありません。病気に分類されるものではないのです」と記している（フロイト著作集第 8 巻 所収）。また、1905 年 10 月 27 日の Die Zeit 紙に掲載されたインタビュー（Isay, 1990 所収）では、「私は、ホモセクシュアルは病人としては扱うべきではないと思う。（中略）（もし病人であるという理屈が通るならば）私たちは彼らの精神的崇高さを尊敬しているにも関わらず、多くの偉大な思想家や学者を病気だと言うことになりはしないか。ホモセクシュアルの人々は病気ではない。そして（それは犯罪ではないのだから）法で裁かれるということもないはずである」と述べている。このように、少なくとも同性愛を「病気である」とは思っていなかったようである。

精神分析医である Isay は、40 人以上のゲイ男性を診察し、20 年以上観察とセラピーを続けた。その結果、彼の結論は、「ホモセクシュアリティというのはゲイ男性にとって正常なことであって、それによって彼らは成長する」ということに達した（Isay, 1990）。その後、Isay はゲイ男性についてのセラピーについても書き記している（Isay, 1996）。

同性愛の分類

過去、何人もの研究者が同性愛の分類を試みているが、それらは大まかにまとめると以下ようになる。

- (1)真性同性愛：性対象は同性のものに限られ、異性は全く性的興味や関心の対象とならず、むしろ冷淡で、性的嫌悪感をもつものである。
- (2)両性的同性愛：同性も異性も性対象とするもので、性心理的な半陰陽ともいうが、身体的に半陰陽であることは稀である。
- (3)機会的同性愛：異性に接することができない外的な条件ため、ある期間だけ同性愛を示すものである。したがって、自由に異性を求め得る環境におかれると、異性愛になる。
- (4)発達期同性愛：思春期に一過性の同性愛で、同性への憧れや友情が恋愛感情に転化したもの。やがて異性愛に変化する。

しかし、現在ではこのような分類は行われていない。それは後述にもある通り、両性愛的同性愛は両性愛者 (Bisexuals) である。機会的同性愛、および発達期同性愛は性的指向性から考えると、それを同性愛とみなすことはできない。これらのことから、真性同性愛というカテゴリーも妥当ではない。

同性愛者の頻度

Gonsiorek と Weinrich (1991) は、同性愛者の頻度について過去の文献をレビューした結果、頻度は 4% から 17% 程度であるとした。また、Michael ら (1994) の調査では、自己認識による頻度で、男性で 2.8%、女性で 1.4% であった。これらの範囲の違いは、サンプリングの方法と同性愛者の定義付けの 2 つの問題に依存している (Greene, 1994)。外見的特徴から確認できる人種的・民族的集団とは違い、レズビアンやゲイ男性は自己報告によってしか確認できない。また、レズビアンやゲイ男性は都市に集中する傾向があり、国中に均等に散らばっているわけではない。なにを以て同性愛者とするのか—例えば

自己認識か、行動か、欲求か、等一によっても頻度は変化する (Michael 他, 1994)。したがって、同性愛者の頻度を決めることは非常に困難であることが言える。

同様の調査は日本でも行われている。総理府青少年対策本部の委託を受け、日本性教育協会 (1981) が高校生・大学生を対象に調査を行った。これによると、「今まで同性に性的魅力を感じたことがある」と答えたのは男子・女子ともに 27.7% で、さらに「今までに同性と性的な身体接触をしたことがある」と答えたのは男子で 5.8%, 女子で 4.9% であった。しかしながら、これをもって「日本の同性愛者の頻度は……」と言うのは前述した通り、危険である。

DSM の流れ

クラフト・エビング以降、同性愛を人格の異常とみなす考え方は、1952 年にアメリカ精神医学会 (American Psychiatric Association) が作成した DSM-I (精神疾患の診断・統計マニュアル第 I 版) にも受け継がれた。DSM-I で、同性愛は社会に悪影響を与えるような病的な人格障害 (Sociopathic Personality Disturbance) の診断項目に含められ、その中の性的な歪みとしてとらえられていた。

1968 年の DSM-II においては、“Sociopathic”こそ取れたものの、やはり人格障害 (Personality Disorder) に含まれていた。

1980 年の DSM-III においては、同性愛は「人格障害」のカテゴリーから姿を消し、新たに設けられた「性心理的障害 (Psychosexual Disorders)」のカテゴリーのもとに分類された。これは同性愛の中でも、「自我異質的同性愛 (Ego-dystonic Homosexuality)」のみが疾病の単位であるとされた。自我異質的同性愛というのは、

- ①異性愛的興奮が持続的に欠如しているか微弱であって、異性愛関係を欲しながら、それをつくったり維持したりすることが顕著に障害されていると訴える
- ②同性愛的興奮の持続したパターンがあり、患者ははっきりとそのことが

嫌で、持続的な苦悩の源泉となっている

というもので、①、②いずれかの条件を満たす者のことである。

この改訂の背景には、当時のゲイリベレーション（ゲイ解放運動）⁽¹⁾によって、政治における同性愛者の立場を急速に向上させ、1974年にアメリカ精神医学会が下した「同性愛は精神障害ではない」という決議に多大な影響を与えたことと、健常な同性愛者（心理療法を受けていない、獄中者ではない、精神病患者収容施設に入院していない）のサンプルを用いたアカデミックな研究結果の影響があった（例えば、Hooker, 1957; Masters & Johnson, 1979; Bell, Weinberg & Hammersmith, 1981）。ここでそれらの研究をいくつか見てみることにする。

Hooker (1957) は、異性愛者と同性愛者を各種投影法（ロールシャッハテスト, TAT, MAPS）を用い測定した。その結果、異性愛者と同性愛者の間での差はみられなかった。したがって、この研究では、同性愛は心理テストによって病的なものとしては存在しないということと、同性愛は精神的な問題を測るための指標では明確に測ることはできない、ということが示された（稲場・Kimmel, 1995）。

Shively と De Cecco (1977) は、人間のセクシュアルアイデンティティ (sexual identity) を生物学的な性 (biological sex), ジェンダーアイデンティティ (gender identity)⁽²⁾, 社会的性役割 (social sex-roll)⁽³⁾, 性的指向性 (sexual orientation)⁽⁴⁾, の4つに分けた。なお、現在では「セクシュアルアイデンティティ」の部分で、「セクシュアリティ (sexuality)」となっている (American Psychological Association, 1998a 参照)。その結果、人間のセクシュアリティに多様性が生まれ、これまで言われていたような「男性同性愛者＝女性的」、あるいは「男性異性愛者＝男性的」とは一概には言えなくなった。例えば、ある人は生物学的に男性で、ジェンダーアイデンティティと社会的性役割が男性でも、異性愛者か同性愛者か両性愛者かはわからない、ということになる。つまり、同性愛者の男性や女性を、外見や行動などで異性愛者と区別することは、ほとんどできないということが言える。

Masters と Johnson (1979) は、異性愛の男性と女性、同性愛の男性と女性

との間の性的な対応や行動における差異, および共通点に関して報告している。Masters と Johnson は, 異性愛の男性と同性愛の男性の間, および異性愛の女性と同性愛の女性の間、性的な対応における解剖学的・生理学的な差異は見いだせなかった。この研究では, 同性愛者には生理学的異常, あるいは性的異常が存在する, という当初からの通説を覆すこととなった(稲場・Kimmel, 1995)。

Bell ら (1981) は, 年齢, 学歴, 宗教において同じ条件の 979 人の同性愛者と 477 人の異性愛者とを比較した。その結果, 幼児期における被調査者とその両親との関係は, それらの被調査者が同性愛者になるか異性愛者になるかという点に対して, 少しも影響を及ぼしていないことが明らかにされた。また, 年長者による誘発や, 異性とあまり関係をもたないことや, 他者によって同性愛者としてのスティグマを押されることによって同性愛が生じる, という説には何ら実証的な裏付けがないことが示された。これらの知見は, 同性愛は両親, あるいは異性との病理学的な関係によって引き起こされるという精神分析的な説明や, 以前からの同性愛の原因に関する理論を論駁するものであった(稲場・Kimmel, 1995)。

その後の 1987 年の DSM-III-R では, 「自我異質的同性愛」という診断項目は姿を消し, 「特定不能の性障害」の中の「自分の性的指向性に対する持続的な著しい苦悩」となった。この背景には, アメリカのほとんどの同性愛者が初期の段階に「自我異質的同性愛」を経るという事実と, このカテゴリーが存在することによって同性愛そのものが精神異常であると勘違いされる弊害を避けるための配慮が影響している。1994 年の DSM-IV においても, 同様にそのような用語は含まれていない。

また, ICD-10 (World Health Organization, 1992) においても, 同性愛は「精神および行動上の疾病分類」における成人のパーソナリティと行動の疾病のリストから削除されている。

これらのことから, 同性愛はもはや「精神異常」や「異常性欲」ではなく, 「正常」であり「健常」なものであることがいえる。現在では, 異性愛(Heterosexuality)と同性愛の違いは, その違いによって派生してくる問題は

異なるが、それぞれの性的指向性のみであると考えられている。

日本における男性同性愛の歴史

日本における男性同性愛の歴史を見る場合に「日本は歴史的には同性愛に対して寛容であった」という言説がある。しかしながら、日本の男性同性愛の歴史を見る場合には、まず「男色（なんしょく）」と「男性同性愛」を区別して考える必要がある。

男色というのは、主に明治期からそれ以前の「男性が男性ともつ性行為」を指している。男色には、稚児、念友、若衆、念者、色友、衆道……等、多くの語彙がある。男色に関する文献は、江戸時代のものに最も多く見られ、それらは否定的というよりは肯定的である。男色は、とりわけ江戸時代史を考える上で、省くことのできない歴史学の重要課題なのである（氏家、1995）。

伝説によれば、男色は弘法大師空海が唐より伝承してきたと言われている。しかしながら、その事実はいずれの史書からも得られていない（岩田、1974）ため、男色の起源は定かではない。しかし、古くから、男色に関する書籍、文献、収録、小説などは時代に応じてあいついで上梓されている。そこには仏家、武士、町人、公家など日本のあらゆる階級の男色の実体が記述され、その時代の男色の人情を知ることができる（平塚、1994）。岩田（1974）は、主に奈良時代から室町時代における男色をまとめ、堂本（1976）は、狂言、能、歌舞伎における男色をまとめている。これらのことから、男色が古くから日本で盛んであったことがうかがえる⁹⁾。

その中でも、特に戦国時代から江戸初期の武士社会において、男色は1つの風俗と言えるほど日常的に観察されていたようである（氏家、1995）。以下はその例である（氏家、1995 から抜粋）。

土佐は維新の前、士気の精強を以て鳴る地である。而して同性契交の土風は薩南のそれに似たものがある。そのため士族の少年でこの事情を解さない者は1人としてこれがない。

つまり、土佐は薩摩に劣らず尚武の風旺盛で、武士の少年で男色の契りの意味を知らぬ者はいなかった。

若し強いてこれを排斥し、男色の接近を避ける者があると、同儕相集つてその家に押しかけて行ってその家の子弟をつかまえて強いてこれを犯す。

つまり、男色を拒む者は、集団で犯された。そして息子が犯されている間、家族はどうしているかというと、

隣室に父母兄弟がいてもこれを顧慮しない。父母兄弟また甘んじて彼らの横恣に委して顧みないのである。

つまり、父も母も兄弟も、助けようとしないのである。「けだし習俗の然らしめる所」、つまり、「土地の伝統的な風習だから」、ということのようである。

戦国武将のなかでも、武田信玄の事例は確実な史料的裏付けがある。彼が晴信時代(1536-59)に、愛する少年(春日源助、後の高坂弾正虎綱)にあてた自筆の誓文が現存している。文面は「弥七郎と寝たことは一度もない。今夜だって……」と、身の潔白を源助に誓っている内容である。いわば、少年に対する精一杯の恋情の吐露であり、現代でいうラブレターに相当するものである(氏家, 1995)。

氏家(1995)は、「少なくとも江戸時代前期までは、武士の間の喧嘩、敵討ちといえ、まず男色の問題が想起されるほど、それは社会的に広く浸透していた。男色は逸脱した性関係として異常視されるところか、逆に武士道の華とさえ賛美された」と述べている。山本常朝が書いた、武士道を説いた「葉隠」においては、葉隠を読み解く鍵の1つが男色の知識にある(小池, 1993)とまで言われている。

日本において初めて「同性愛」という言葉が使われたのは、「変態性慾論(羽太・澤田, 1915)」の副題「同性愛と色情狂」からである。しかし、この

本文では「同性愛」という言葉は使われていない。実質上のは澤田（1920 年 6 月）の「神秘なる同性愛」からであると思われる。本稿を執筆現在、この書籍の所蔵は確認できなかったが、内容としては「変態性慾論」から同性愛の部分を一書に独立し、さらに加筆修正を加えたもので、目次は「同性愛の発生及発達に関して」、「同性愛の原因及び原理に関して」、「同性愛の起源歴史及びその地理的分布に関して」、等となっているからである。事実、この書籍が発行された後、同年 7 月に「同性愛の現象に対する処置解決」、9 月に「男性間に於ける同性愛」、翌年に「同性愛の研究」と、立て続けに「同性愛」という言葉が用いられている。

変態性慾論での同性愛に関する記述は、その大部分がクラフト・エビングからの引用である。したがって、日本においては、羽太・澤田が「同性愛＝変態・異常・病気」という図式を提唱したと言えよう。そしてその図式は、1920 年以降に確立されたと考えられる。この「同性愛＝変態」という図式を内面化した、悩める同性愛者が 1922 年に雑誌「変態性慾」に投書している。以下、その文を引用する。

此の自分の変態な恋に苦しむ「辛さ」を或は此の方面としては有り触れた事からも知れませんが書き綴つて、理解深き先生に打ち明けて、せめてもの心やりとしたいと思います……此の不幸に生まれて来た自分を憐れんで下さい……先生何とかならないものでせうか。実に苦しいのです。一度の望みも叶はないとすれば、一生こんなに苦しまなければなりませんまいか……此の方面の御造深き先生の御同情を仰ぎ、せめてもの慰めとして生きて行きます。

この文章から、1922 年には「同性愛＝変態」という図式が定着していたことが言えるのではないか。そして、この図式が今現在もゲイ男性を悩ます原因の 1 つとなっている。つまり、この投書に現代までの悩める同性愛者の原型を見ることができるといえよう（古川、1994）。

以上のことから、男色はごく当たり前の行為、あるいは風習として存在していたものに対し、男性同性愛は変態・異常・病気なものとして存在していた。

つまり、「男色＝男性同性愛」と考えるのは誤りであることが言える。したがって、最初に出てきた言説は誤りであると考えられる。

言葉の問題

今まで「男性に魅力を抱く男性」のことを「男性同性愛者」と記してきたが、「同性愛」という言葉の歴史を振り返ると、「異常」とか「病気」というイメージが強い。これは現代においても「同性愛者」と聞くと、そのようなネガティブなイメージが連想されるのではないか。現在では同性愛は異常でも病気でもなく、性的指向性が同性に向いているというだけである。したがって、その歴史から考えても「同性愛者」という言葉は不適切ではないかと思われる。

日本において特徴的なものが、「男性に魅力を抱く男性」を「ホモ」という表現の仕方である。これは英語の“Homosexuals”を略した言い方であるが、これは完全な差別的な表現である。なぜなら、“Japanese（日本人）”を“Jap”と表現した場合に差別的な表現になるのと同じように、略した言い方は差別的な表現である。また、これは本人の主観にもよるが、「ホモ」と言われると、非常に不快感をおぼえる「男性に魅力を抱く男性」もいる。これらのことから、「ホモ」という表現はすべきではない。また、レズビアンも同様に、「レズ」という表現はすべきではない。

近年、アメリカでは“Homosexuals”という表現ではなく、“Lesbians”や“Gay men”という表現を用いることが奨励されている。これは“Homosexuals（同性愛者）”という言葉からは、過去のネガティブなステレオタイプがイメージされることと、主に男性を方を指している場合が多く、レズビアンが存在が不可視になってしまうことに由来している。レズビアン（Lesbians）やゲイ男性（Gay men）という言葉は、特定のグループに言及するときに用いる。レズビアン（Lesbian）やゲイ（Gay）は、主としてアイデンティティに言及するときや、それらのアイデンティティを分かち合う人々の間で発達した、現代の文化やコミュニティに言及するときに用いる。また、ゲイは広義の意味では男性と女性の両方を含み、狭義の意味では男性のみである（American

Psychological Association, 1994; Committee on lesbian and gay concerns, 1991)。

性的指向性は、性行為からは区別される。なぜなら、ある男性や女性は同性の人と性的関係を持っていても、自分自身をレズビアンやゲイとはみなさない人もいる。また、異性と結婚をしていて子どものいる男性や女性で、時折同性と性的関係をもっていて、自分自身をレズビアンやゲイとみなしている人もいる。これらのことから、少なくともこれまでの研究に見られたような、本人の性行為からレズビアンやゲイと判断したり、空想上の性行為から判断するのは誤りであることが言える。

言葉から連想されるイメージについての研究がある。荻野 (1996) は、「男性に魅力を抱く男性」を表現すると思われる代表的な 4 つの言葉のイメージについて、SD 法を用いて測定した。その代表的な 4 つの言葉は、「男性同性愛」、「ゲイ」、「ホモ」、「オカマ」であった。その結果、最もネガティブなイメージであったのが「ホモ」で、最もポジティブであったのが「ゲイ」であった。また、「オカマ」は「男性に魅力を抱く男性」というよりは、「女性的な男性」をイメージしていた。このことから、言葉の問題の重要性が示唆されている。

日本における実証的な同性愛研究

日本における実証的な同性愛の研究は、そのほとんどが男性同性愛を対象にしており、病気や治療すべきものとされていた (加藤他, 1960; 村上他, 1963; 高橋, 1960)。しかしながら、これらの研究は DSM-III 以前であり、そのような見方も仕方ないと言えよう。その後、高橋 (1981) が「同性愛とトランスセクシュアリスム」というタイトルで論文を書いている。タイトルのみを見ると、同性愛と性同一性障害 (gender identity disorder)⁶⁾ が並列なものとなっており、同じもののような誤解を与えている。これまでの研究に加え、太田 (1957) や黒柳 (1987) もそれぞれの知見から類型を試みているが、その後の理論的發展はみられなかった。

同性愛を、病気や治療すべきものとしてではないアプローチを用いた近年の

公刊された研究として、荻野 (1998)；和田 (1996)；山下・源氏田 (1996) の異性愛者のレズビアンやゲイ男性に対する態度研究や、砂川ら (1997) のゲイ男性をとりまく性的環境の調査や、近藤 (1987) のゲイ男性向けの雑誌の文通交際欄から疑似親族役割名称をとりだし、日米の役割行動を比較した研究や、堀田 (1998) の同性愛を治療するという医学モデルではなく、同性愛アイデンティティ形成をサポートする心理面接の提起した研究がある。しかし、どれも単一の研究であり、今後の理論的発展が期待される。

今後の展開

これまで同性愛の歴史を見てきたが、病気、異常、治療すべきものから正常、健常、異性愛との差は性的指向性のみと変化している。事実、アメリカ精神医学会は 1998 年 12 月 11 日の会議で、個人の性的指向性を同性から異性と変える転換療法 (“reparative” or “conversion” therapy) に反対することを、満場一致の投票によって採択した（詳しくは、American Psychiatric Association, 1998 参照）。アメリカ心理学会も同様の決議を下している（詳しくは、American Psychological Association, 1998a, 1998b 参照）。

レズビアンやゲイ男性と性同一性障害やトランスセクシュアル (transsexual)⁽⁷⁾、トランスジェンダー (transgender)⁽⁸⁾、トランスヴェスタイト (transvestite)⁽⁹⁾ は混同されがちであるが、まったく別個のものである。なぜなら、レズビアンやゲイ男性の主な問題は性的指向性であり、性同一性障害の主な問題はジェンダーアイデンティティである。両者は異なった次元に位置するものであり、性同一性障害者の性的指向性は人によって異なっているためである。

「同性に魅力を抱く人」を示す言葉として「同性愛者」ではなく、「レズビアン」や「ゲイ男性」あるいは「ゲイ」と記述することが望ましいということが示された。

レズビアンやゲイ男性に対するアプローチも、これまでような「治療すべきもの」とみなした精神医学的アプローチや臨床心理学的アプローチではなく、

レズビアンやゲイ男性をアファーマティブ (affirmative) に捉えたアプローチや、社会心理学的アプローチへと変化する必要がある。その1つの例として、アメリカの「ヒューマンセクシュアリティ」コースでの、レズビアンやゲイ男性に関する考え方が挙げられる。鍛冶 (1994) によればその基本的な考え方は、

- ①レズビアンやゲイは、性的指向性としても行為としても正常なものである。
- ②思春期におけるレズビアンやゲイは、成人期の異性愛への1段階ではない。
- ③性的指向性は、子ども時代の初期までに確立している。したがって、性的指向性を変えようとする試みは、非科学的で不当であり、心理学的に無駄である。
- ④ホモフォビア (Homophobia)¹⁰ は、他の偏見と同様に、生き方の多様性を妨げ抑圧する有害で悪質なものである。
- ⑤自分の性的指向性を本人は発見するが、選択はできない。
- ⑥レズビアンやゲイであるとは本人の指向、または状態であり、どのような行為を行っているかではない。
- ⑦女っばいか男っばいかは、性的指向性とは直接関係ない。
- ⑧レズビアンやゲイ男性を理解するのに、原因にこだわる必要はない。
- ⑨一般に考えられている、親が原因でレズビアンやゲイ男性になるという理論は間違っており、子どもにもまして、親達に悪影響を与えているとされる。

今後の研究としては、異性愛者のレズビアンやゲイ男性に対する態度研究や、レズビアンやゲイ男性をアファーマティブに捉えた上でのアイデンティティや発達、恋愛、子育て、内面化されたホモフォビア (Internalized homophobia)¹¹ に関する研究等が必要であろう。その際には、Herek ら (1991) が述べているように、同性愛差別者 (Heterosexist) 達が陥りやすいバイアスに気をつけなければならない。また、もしレズビアンやゲイ男性になる原因を研究するならば、同時にヘテロセクシュアルやバイセクシュアルになる原因も研究する必要があるのではないか。

いずれにせよ、日本のレズビアンやゲイ男性に関する真の実証的な研究はこ

れから始まると言えよう。

註

- (1) ゲイリベレーションの発端となったのは、1969年ニューヨークで起きたストーンウォール事件である。この事件以前にも、レズビアンやゲイの団体が活動を行っていたが、この事件はその後の運動に決定的な影響を与えた点で異なる (Marcus, 1993)。
- (2) 男性、あるいは女性であるという心理的認識。
- (3) 女性的・男性的行動に関する文化的規範への固執。
- (4) 特定のジェンダーを持った個人に対する永続的な魅力である。その魅力とは、感情的 (emotional) で、ロマンティックで、性的で、愛情のこもったものである。具体的には、異性に対して魅力を抱く人は異性愛的性的指向性 (ヘテロセクシュアル)、同性に対して魅力を抱く人は同性愛的性的指向性 (レズビアン・ゲイ男性)、両方の性 (異性と同性) に対して魅力を抱く人は両性愛的性的指向性 (バイセクシュアル)、となる。なお、性的指向性は性的嗜好性 (sexual preference) とは区別される。
- (5) 例えば、醍醐寺秘蔵で公開禁止となっている鳥羽僧正が書いたとされる「男色絵巻」、男色と女色 (異性との性行為) の優越論争をしている「田夫物語」、井原西鶴の「男色大鑑」、衆道小拙集の「昨日波今日能物語」、 「男色十寸鏡」等がある。男色文献については、平塚 (1994) や岩田 (1972)、田中 (1924) を参照。風俗としてみた場合、江戸時代には「蔭間茶屋」という、男色専門の遊郭が存在していた。
- (6) 日本精神神経学会 (1997) は、「生物学的には完全に正常であり、しかも自分の肉体がどちらかの性に所属しているかをはっきり認知していながら、その反面で、人格的には自分が別の性に属していると確信している状態」と定義している。
- (7) 自分の身体の性別やそれに属する社会的、文化的性別に対して強い違和感や不快感を感じている人のなかで、身体の性別と精神の性別を適合させるために、性別再指定手術 (sex reassignment surgery) まで必要とする

人（野宮，1998）。

- (8) 自分の身体の性別やそれに属する社会的，文化的性別に対して何らかの違和感や不快感を感じている人のなかで，反対の性での生活，もしくは既存の性役割にとらわれない形で生活を望み，性別再指定手術までは必要としない人（野宮，1998）。
- (9) クロスドレッサー（Cross Dresser）とも言う。これは異性装者，すなわち一般で言われる女装者や男装者のことである。彼らの大部分は身体や社会に対する性別違和感がないとされるが，異性装をすることで性別違和感の解消を図っている性同一性障害者も混じっている（野宮，1998）。
- (10) ヘテロセクシズム（Heterosexism）とも言う。ホモフォビアもヘテロセクシズムも一般的には，同性愛的行動やレズビアンやゲイ男性に対する敵意や偏見を指している。しかしながら，Herek（1995）は「レズビアンやゲイ男性に対する偏見は，本当の恐怖症（phobia）ではない。なぜなら，レズビアンやゲイ男性に対する偏見は，必ずしも恐怖が基礎となっているわけでもないし，また，ある恐怖症が明らかな人に見られるような，その恐怖症が不合理なものであったり，機能障害となっているわけではない」等の理由から，ホモフォビアよりもヘテロセクシズムを使うことを奨励している。
- (11) Shidlo（1994）は，「他者の同性愛に対するネガティブな態度と，自分自身のホモセクシュアルな特徴に対するネガティブな態度」と定義している。その特徴とは，同性との性的感情や愛情のこもった感情，同性との性行為，同性との親密な関係，自分自身をレズビアンやゲイ，あるいは同性愛者とみなすこと，を包含している。これについては，Meyer と Dean（1998）や Shidlo（1994）に詳しい。

引用文献

- American Psychiatric Association. 1952 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders(DSM-I). American Psychiatric Association.
- American Psychiatric Association. 1968 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Second Edition (DSM-II). American Psychiatric Association.
- American Psychiatric Association. 1980 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Third Edition (DSM-III). American Psychiatric Association.
- American Psychiatric Association. 1987 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Third Edition Revised (DSM-III-R). American Psychiatric Association. 高橋三郎（訳）1988 DSM-III-R 精神障害の診断・統計マニュアル 医学書院
- American Psychiatric Association. 1994 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition (DSM-IV). American Psychiatric Association. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）1996 DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- American Psychiatric Association. 1998 American Psychiatric Association rebukes reparative therapy. http://www.psych.org/news_stand/rep_therapy.html (1998年12月現在)
- American Psychological Association. 1994 Publication manual of the American Psychological Association, Fourth Edition. Washington, D C: American Psychological Association.
- American Psychological Association. 1998a Answers to your question about sexual orientation and homosexuality. <http://www.apa.org/pubinfo/orient.html> (1998年12月現在)
- American Psychological Association. 1998b Can sexual orientation change with therapy ? <http://www.apa.org/monitor/sep96/converta.html> (1998年12月現在)

- Bell, A. P., Weinberg, M. S., & Hammersmith, S. K. 1981 Sexual preference: Its development in men and women. Bloomington: Indiana University Press.
- Committee on Lesbian and Gay Concerns, American Psychological Association. 1991 Avoiding heterosexual bias in language. *American Psychologist*, **46**, 973-974.
- 堂本正樹 1976 増補版・男色演劇史 出帆社
- 古川誠 1994 セクシュアリティの変容：近代日本の同性愛をめぐる 3 つのコード 日米女性ジャーナル, **17**, 29-55.
- Gonsiorek, J. C., & Weinrich, J. D. 1991 The definition and scope of sexual orientation. In J. C. Gonsiorek & J. D. Weinrich (Eds.), *Homosexuality: Research implications for public policy*. Pp. 1-12. Newbury Park, CA: Sage.
- Greene, B. 1994 Lesbian and gay sexual orientations: Implications for clinical training, practice, and research. In B. Greene & G. M. Herek (Eds.), *Lesbian and gay psychology: Theory, research, and clinical applications*. Pp. 1-24. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 羽太鋭治・澤田順次郎 1915 変態性慾論（同性愛と色情狂）春陽堂
- Herek, G. M. 1995 Psychological heterosexism in the United States. In A. R. D'Augelli & C. J. Patterson (Eds.), *Lesbian, gay, and bisexual identities over the lifespan: Psychological perspectives*. Pp. 321-346. New York: Oxford University Press.
- Herek, G. M., Kimmel, D. C., Amaro, H., & Melton, G. B. 1991 Avoiding heterosexist bias in psychological research. *American Psychologist*, **46**, 957-963.
- 平塚良宣 1994 日本における男色の研究 人間の科学社（普及版）
- Hooker, E. A. 1957 The adjustment of the male overt homosexual. *Journal of Projective Techniques*, **21**, 17-31.
- 堀田香織 1998 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成 学生相談研究, **19**, 13-21.

- 生松敬三他（訳）1974 フロイト著作集第8巻 書簡集 人文書院
- 井村恒郎・小此木啓吾他（訳）1970 フロイト著作集第6巻 自我論・不安本能論 人文書院
- 稲場雅紀・Kimmel, D. C. 1995 精神疾患単位としての同性愛：歴史的展望
季刊 精神科診断学, **6**, 157-170.
- Isay, R. A. 1990 Being homosexual : Gay men and their development.
Northvale, N. J. : Jason Aronson Inc. 金城克哉（訳）1996 ホモセク
シュアルであるということ：ゲイの男性と心理的発達 太陽社
- Isay, R. A. 1996 Becoming gay : The journey to self-acceptance. New York
: Pantheon Books.
- 岩田準一 1972 男色文献書誌 岩田貞雄（発行者）
- 岩田準一 1974 本朝男色考 古川書店
- 鍛冶良実 1994 ニューヨークで学ぶ同性愛の基礎講座 川辺金蔵（編）
Sexual Science 特集：同性愛 27号 (Vol.3, No.6) Pp. 50-53. 日本アク
セル・シュプリング出版
- 加藤正明・片口安史・田頭寿子 1960 男性同性愛の臨床的研究 精神衛生
研究, **8**, 1-26.
- 懸田克躬・高橋義孝他（訳）1969 フロイト著作集第5巻 性欲論 症例研究
人文書院
- 小池喜明 1993 「葉隠」の叡智：誤一度もなき者は危く候 講談社現代新書
- 近藤祐一 1987 男性同性愛者文通交際欄における疑似親族名称用法：役割
行動の日米比較 アカデミア文学・語学編, **42**, 99-120.
- Krafft-Ebing, R. V. 1886 Psychopathia sexualis. 日本法医学会（訳）
1894 色情狂篇 日本法医学会
- Krafft-Ebing, R. V. 1886 Psychopathia sexualis. 大日本文明協会（訳）
1913 変態性慾心理 大日本文明協会
- Krafft-Ebing, R. V. 1886 Psychopathia sexualis. 松戸淳（訳）1951 変態
性慾心理 紫書房
- Krafft-Ebing, R. V. 1886 Psychopathia sexualis. 平野威馬雄（訳）1956
世界性学全集 7 変態性慾心理学 河出書房

- 黒柳俊恭 1987 彷徨えるジェンダー：性別不快症候群のエスノグラフィー
現代書館
- Marcus, E. 1993 Is it a choice?: Answers to 300 of the most frequently
asked questions about gays and lesbians. San Francisco: Harper San
Francisco. 金城克哉（訳）1997 Q & A 同性愛を知るための基礎知識
明石書店
- Masters, W. H., & Johnson, V. E. 1979 Homosexuality in perspectives.
Boston: Little, Brown. 謝国権（訳）1980 同性愛の実態 池田書店
- Meyer, I. H., & Dean, L. 1998 Internalized homophobia, intimacy, and
sexual behavior among gay and bisexual men. In G. M. Herek (Eds.),
*Stigma and sexual orientation: Understanding prejudice against
lesbians, gay men, and bisexuals*. Pp.160-186. Thousand Oaks, CA:
Sage.
- Michael, R. T., Gagnon, J. H., Laumann, E. O., & Kolata, G. 1994 Sex in
America: A definitive survey. Boston: Little, Brown. 近藤隆文（訳）
1996 Sex in America ～はじめての実態調査 日本放送出版協会
- 宮瀬準一 1920 同性愛の現象に対する処置解決 新愛知, 三重附録
- 村上敏雄・中西峻・大熊文男・島津業・遠藤蔵市 1963 男性同性愛の精神
医学的考察 精神神経学雑誌, **65**, 880-894.
- 日本性教育協会 1981 青少年の性行動：わが国の高校生・大学生に関する
調査報告（第2回）報告書
- 日本精神神経学会（性同一性障害に関する特別委員会）1997 性同一性障害
に関する答申と提言
- 野宮アキ 1998 「性同一性障害者にも生きやすい社会を！」資料集 TS と
TGを支える人々の会資料作成グループ
- 荻野員也 1996 大学生の男性同性愛に対する態度について 東北福祉大学
卒業論文（未公開）
- 荻野員也 1998 異性愛大学生のゲイに対する態度 日本社会心理学会第 39
回大会発表論文集, 106-107.
- 太田典礼 1957 第三の性 人間の科学社（普及版）

澤田順次郎 1920 神秘なる同性愛 共益社

Shidlo, A. 1994 Internalized homophobia: Conceptual and empirical issues in measurement. In B. Greene & G. M. Herek (Eds.), *Lesbian and gay psychology: Theory, research, and clinical applications*. Pp. 176-205. Thousand Oaks, CA: Sage.

Shively, M. G., & De Cecco, J. P. 1977 Components of sexual identity. *Journal of Homosexuality*, 3 (1), 41-48.

砂川秀樹・池上千寿子・徐淑子・生島嗣・富沢一洋・日高庸晴・斉藤明宏・篠原欣介・土屋仁応 1997 「ハッテン場」など日本のゲイをとりまく性的環境の調査, 分析—アウトリーチ活動をアクション・リサーチの手法として— 日本=性研究会議会報, 9, 18-29.

高木喜寛 1921 同性愛の研究 性, 4 (4).

高橋進 1960 男子同性愛者の臨床的研究 精神分析研究, 7 (5), 23-43.

高橋進 1981 同性愛とトランスセクシュアリスム 臨床精神医学, 10, 675-682.

田中香涯 1920 男性間に於ける同性愛 臨時増刊男性美 792 号

田中香涯 (編) 1922 男子同性愛の一実例 変態性慾, 1, 241-243.

田中香涯 (編) 1924 男色に関する史的及び文学的考証 変態性慾, 4, 194-235.

氏家幹人 1995 武士道とエロス 講談社現代新書

和田実 1996 青年の同性愛に対する態度: 性および性役割同一性による差異 社会心理学研究, 12, 9-19.

World Health Organization. 1992 The ICD-10 classification of mental and behavioural disorders: Clinical descriptions and diagnostic guidelines. World Health Organization. 融道男他 (監訳) 1993 ICD-10 精神および行動の障害: 臨床記述と診断ガイドライン 医学書院

山本常朝 松永義弘 (訳) 1980 葉隠 (上) (中) (下) 教育社

山下玲子・源氏田憲一 1996 同性愛者に対する態度についての一研究: 男女差, メディア接触量を中心として 一橋研究, 21 (2), 163-177.